繪本考閑記

五編

六

伊13
1833
54

特13へ
1833
54

繪本太閤記五篇巻之六

目録

成政賜久所諫話　目録
秀吉御官位昇進話
人家十鳥浪華之光景
龍川一益蟹江信雄ガ勢と戦ふ図
秀吉御官位昇進之図
秀吉ム根来寺征伐之話
ム石垣合戦之図
ム石垣落城の図

根来の級一房背安家の諸士と戦ふ図
根来寺焼亡ふ話　付図
紀伊国平均ふ話
大田村の城水責の図
秀吉公和泉濱を経巡り給ふ図
同国征伐の話
長曾我部宮内少輔元親の像
勝頼公長篠城の水の手を断
城名を苦むる図
栗名九郎村風雨の夜城を捨て落ち図

秋田県立図書館蔵

真顕記五篇巻之六

盛政勝久所業

去程日一人を殺して三軍震ひこれを殺せ一人と雖ども万人脱ぬ
べ玄と賞せよ殺せと云ふと貴ひ賞とろいふを貴ぶとうやされば義弟
寺秀吉卿祇戸柴田ゞ一族と蛮く討亡ぼ流孤の国全く平ぎ
龍のと天せる蛾ひて乱れの亡ぼ国より坂本の城よへ
て備方の政ゆを受ぬ亡ぼ治ふ附よ濃年の加茂ゆしば国くの諸度
雑下の軍士悪く系と小国穏ふたいっきまたく国出さ〜抑ぼ
と節るうるとてさまくの捧げ把と堅ぬ賀と濃坂本の城ゆ馬乗
うて騒集せり秀吉卿の威勢と茅ぬ百倍張〜りきべ九なり
実ふ佐久間玄蕃改盛政柴田権六勝久い山口甚兵衛尉副田甚九

秋田県立図書館蔵

盛政
勝久
諸せう国

清門にて監せられ秀吉の陣に至りしが同月七日秀吉の御下知として
京洛中を引渡し六条河原にて首を刎らるべしとて浅野弥
弥平兵衛を宰領とし両人を守護し京都を引せ洛中洛外の人
民共に見せしむ玄蕃が兄弟の有様を見んとやらく衢に群をなし
難を避け見物す扨六条河原は町に面して柵を結び数多の武士
百余人鉄炮に火縄を挟み厳重にこれを守護す朝雄両人の刑場と柵
の中へ引入首斬人の武士立かゝる其太刀引そばめ立寄り用意をなし
此時玄蕃允朝雄弥平兵衛に向ひ我運尽て勝家が為に命を果すは
是も無念ながら勝家が甥とて小身にはあれど秀吉公を海道にて捕へんとの
おもくせんじたるものを嗚呼悪くれ気もなくいしき様なれど眼を見開き
朝雄兄を見て此期に臨んで見苦しき有さまをやすく...

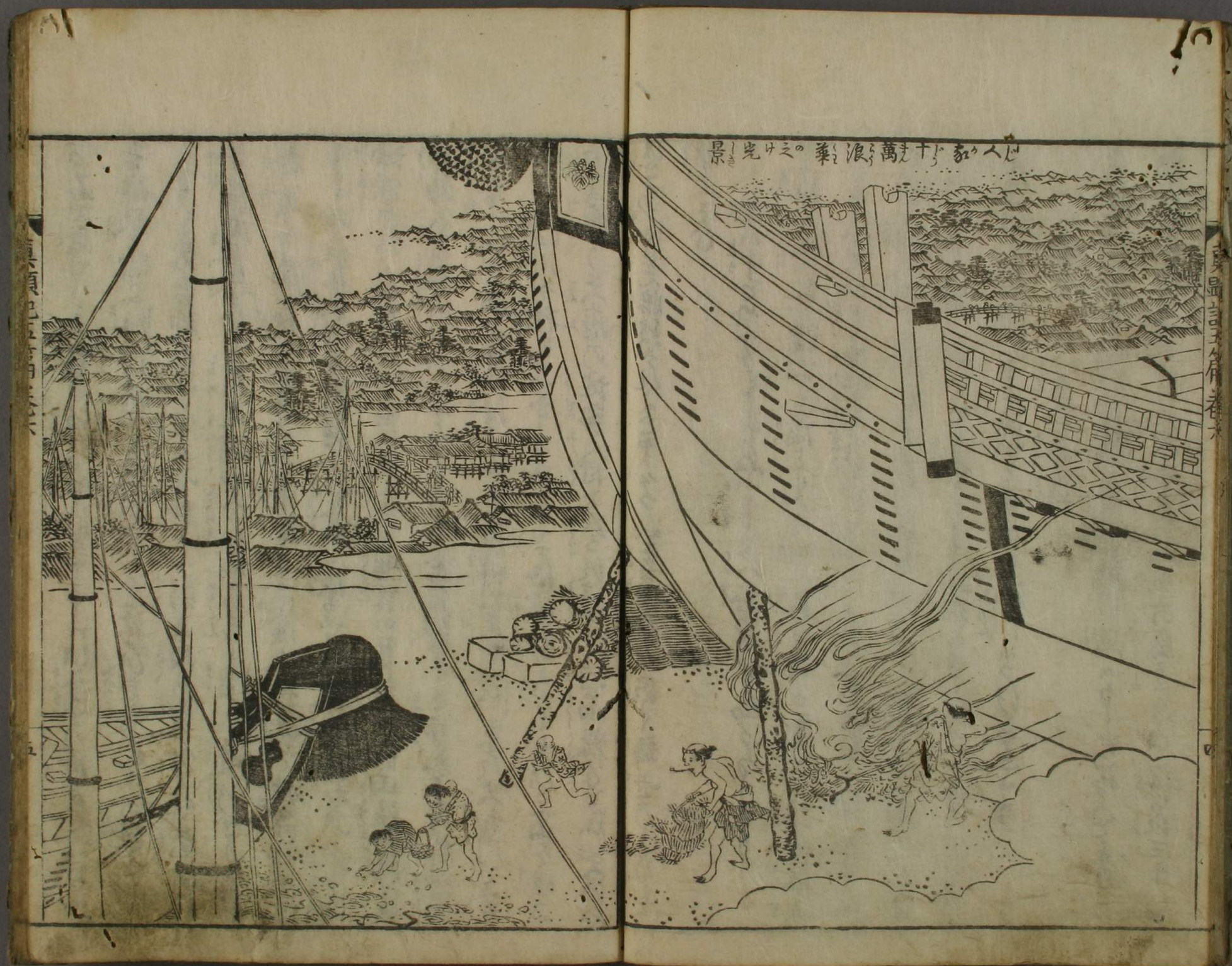
ひとゝしく覚悟致されよとやがて玄蕃允盛政先ず辞世の一首をと
口ずさむ

世の中をめぐりもはてぬ小車は火宅の門を出るなりけり

と詠じ終れば権六も諸ともに首は落されける盛政は清和源氏
にして小田の重臣佐久間大学助が嫡男右衛門尉信盛が甥大学助
柴田が姉を娶りて生むる子なれば勝家は母方の叔父也権六は勝久とて勝
家が妹の子又母におくれし孤となり勝家養育して猶子とせり盛政
生年廿八歳勝久十六歳是も同じく獄門にかけられける

秀吉御官位昇進

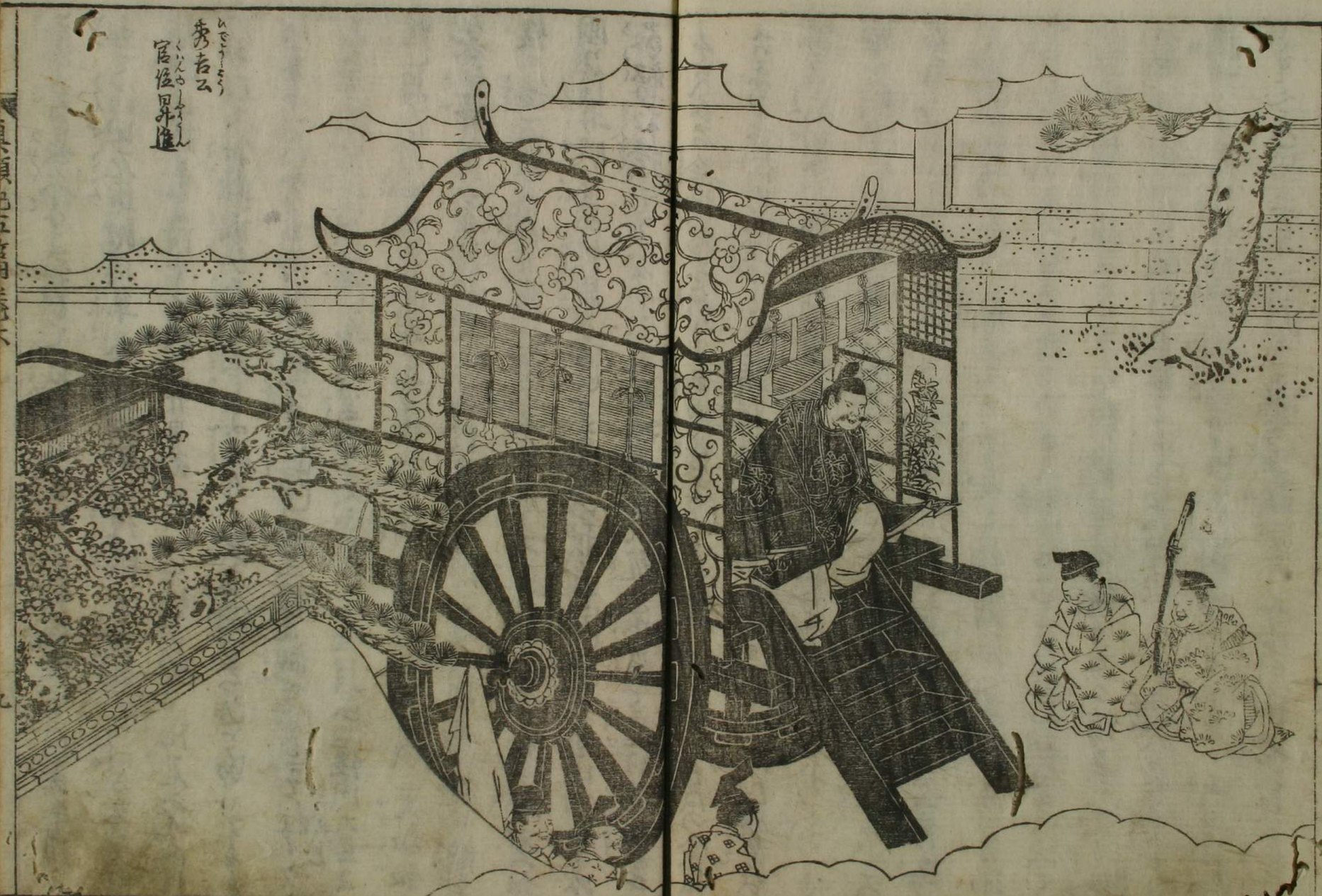
天正十一年夏五月三法師秀信御元服ありて三位となし奉り秀吉は
御のうしろ見として安土より国々を治め岐阜の城主となし濃州三十余


人力及ばず十萬浪の之を先景

万石を進ぜらるべく後は波阿中納言と申せし遠の御子と同じ
き御参議は陸奥に流のよし叡せらるを法皇自ら天下の政の小
とちく奏の君郷の豊中丸入り日くに新しく月は豊くなれば芝蘭の
外多摩寺恵美を前近国の太石小石居と唱して賜ぜりとれば
都近くは御座と云ふ帝都とも優く勅歌を揚ぎ法皇
とく桜花乱紅石山の地小金城と籠せ法皇自身仏法の
城体を郎奏政行切市正貞元年造営の基礎として山法山門の国
南海の武東山の人夫を以て二年金銭を種くを功なりて抑此地の
秘勝と謂へ西い滄海洋々として自浪幻天を渡り東は大和門と夢
び山と渡川を抱て其中は亭々たる城郭るくそびえ山を接ぎ
雲は遠く天府の地勢人目を驚ぶ湊は河船繁く陸は大路の
洪流漲り湧て釣みの艇舸其間は渡め櫓艇の奏掉の音鴻来湖
面を移るし其市中は良材巧匠を集し瓦屋甍と連雲天下の財宝を積
うさ〳〵たるの羽のごとく鳳の鱗の如く華る蘭蕙は風と薫
求る者は還て貴賤を問て鼎は食ひ風姿は面貌の地と宝と称
して大坂とも云ふ名り陣所の陣所の法を今は軍門と唱へ城
陣所の名は郎行切が宮い城の良はなり宝と行郎助と
しと今略して行郎と呼ぶ奏の君郷は金城は居所定め法皇国
中国九州の州いざる者と征せんと豫め東国は法皇の勅
者い武と云ふ小御会分三七信孝強勇にして信雄卿の
知に法皇は怒ち兄弟牟櫛は及び紘は抑源の大合戦

瀧川一益
蟹江ヶ
信雄が
勢と
戦ふ
図

ゆう信長運拙くして害し給ひぬるこゝに信雄卿我と為向うべき
旨とそうろうふ郡て羽柴筑前守の田の同臣外様の大名すべく皆秀吉に
悪を給ひ今い秀吉と乙さんと密に謀計をめぐらさんとそろ秀吉
卿も為向うべきと楽給ひ信雄の部屋松島の城を津川
玄番允守勝の城を岡田長門守刈安賀の城を海老田富九郎志
を通じ信雄の内儀に何ひ給へ信雄さんと疑ひて此三人を長島の
城に招引せ給へと報言してしより秀吉信雄歌くしあり
尚も天下の大乱と成り日夜合戦止時なし家康川尻近辺に
ましまさる先に信長勝家を一味して秀吉卿に敵対せ給ひ自国の軍大
きに敗北し剃へ信長勝家も滅亡されが秀吉卿に降伏して
そよみ石橋技術を外へ云甲斐なくく傍に小今秀吉の合戦
よい秀吉卿の味方として接戦の憂節と見さびやとそひ解云ひの
城を柴田与十郎と心を合せ信雄卿と討撃んと自三百余人の
勢を引き組て伊賀の城へいろふ歌方よりよくれ見ろ大
軍ひしくと云聞さんぐる討を乱れが瀧川勢まい城に入まい海
に深ひ移りぬるく孤をちり力尽てる信雄卿へ降参秀吉卿
へちり引ぬとそひろが余りのまる和りとやそひそん城心寄に入く
落城後城後にまるひ彼地すて帰りる信長公御立遊
の舟い柴田羽柴瀧川先角とくに大光の一人そ関八州の家臣
浦せ給へ勇名無双の剛兵なりしが御りあるまい義方の
とくに天正十二年に月秀吉卿の軍旗へ軍勢ねる計多勝入森


秀吉公
宮位昇進

義満公名長久を以て戦死を後武勇[illegible]ゟ月奉十月
[illegible]て富田左近将監隆人名両郡を[illegible]て武和を計る秀吉
信雄両郷を以ゟ月ゟて月廿日武田河内守[illegible]ひく福見あり実
に抑て和睦調ひ千代忍ちゟ浦り人民妻孥のゝひとゝ[illegible]
月奉十一月秀吉郷指大納言[illegible]後三位ゟ叙せ[illegible]
志きりに官位昇進[illegible]ひ翌年天正十三年二月正二位内大臣ゟ
任[illegible]ひ御[illegible]ゟ浦守秀の長郷ハ後二位大納言ゟ叙[illegible]大和和
泉紀伊百万石を賜せ[illegible]ゟ御[illegible]る孫七郎秀次郷官ハ権中納言
後ハ後三位ゟ昇り近江国の太守ゟ大納言秀長郷ゟ場丈和
国い筒井順慶の跡国ゟ[illegible]ゟ奉の秋[illegible]ゟ息長に郎実次
[illegible]ゟ小田実次酒ゟ[illegible]ゟ[illegible]と唐げ恩[illegible]

ゟ浦り名ハ秀吉郷甚[illegible]ひ居城筒井の城を綿ろて修ハ
実ゟ修せ[illegible]ゟ郡山ゟ居城を築せ秀長郷の居城し後ゟ[illegible]
秀長郷と大和大納言殿と称ゟ筒井善代の旧臣後士皆郎山ゟ集[illegible]秀長郷の家士ゟ[illegible]

秀吉公根来寺征伐

実利の来国ゟ知[illegible]ゟ国を郡を地とゟ[illegible]
ゟ山代の出ゟ[illegible]ゟ国人朝ゟい何系度を国の目と後ぎ[illegible]
を人乃紛淆ゟ[illegible]ゟ武士ゟい法師ゟとゟ今を下
神のゟ後ゟ国政をゟ[illegible]ゟ後小時の国の制とゟ[illegible]
ゟ荒し[illegible]神武士風時乃者ゟ村里を掠ゟ[illegible]
集ゟ[illegible]ゟ[illegible]財宝を求ひ[illegible]焼ゟ[illegible]

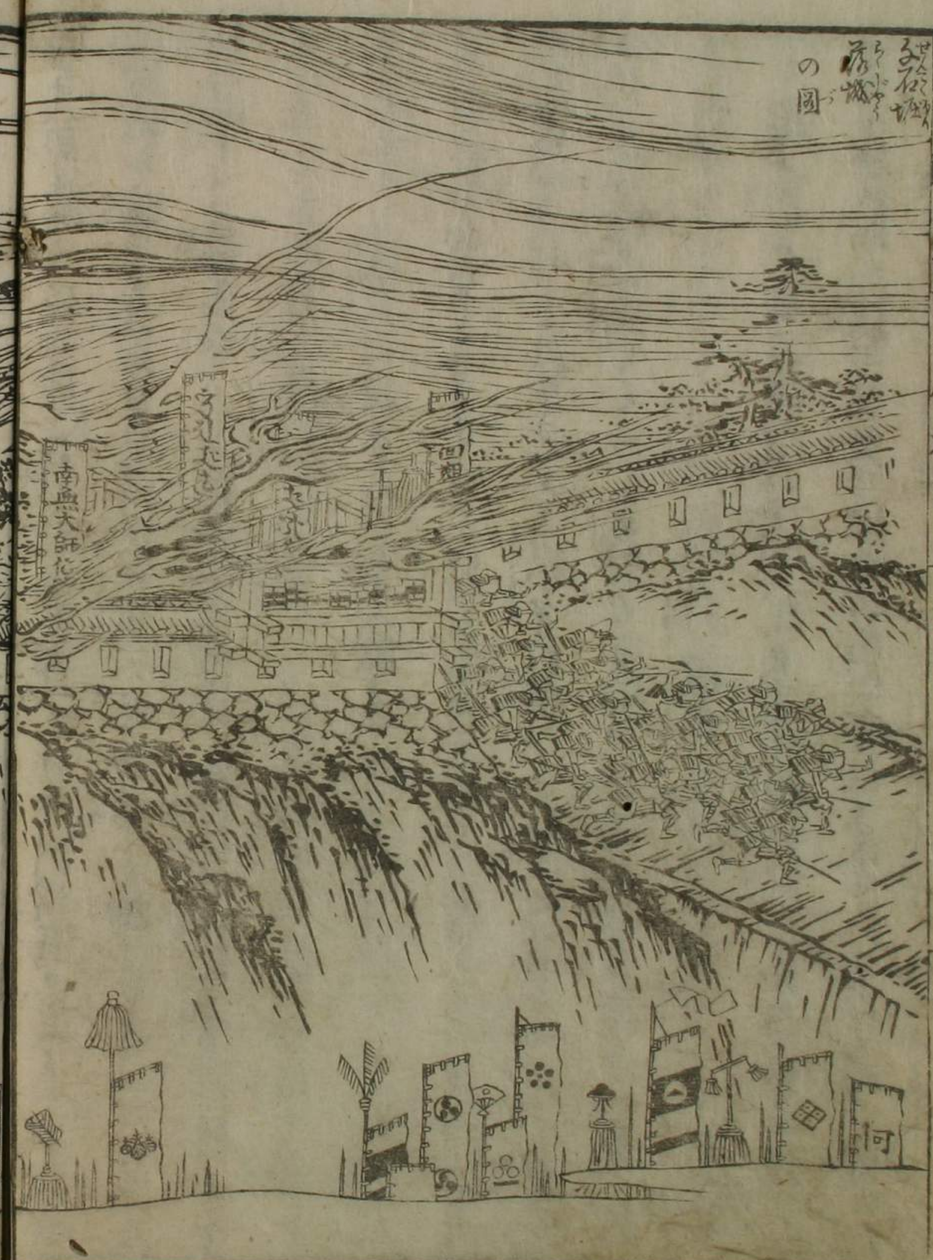
勢多より四国の者共攻紀の者のこゝろ心もこゝろかけ〳〵うろたへけ
紀世のさまこゝろ〻紀ちを今秀吉公の武威よりひきかく紀世こゝ
世の中にも大まゝ正名と仰〳〵仁義と守る頗る名平の機を別し
名名よりかく秀吉公も此度命を背き武威の命を背ぎる者
を悪く征伐めぐしとて良を沙汰に及ばせ給へ実に紀伊国と申へ
〳〵日本南海の大国にて蜀道函谷の固めにて余り過多国
のなりさだるべく熊野本彩宮の別当武い滝山の衆徒多猛
き国政を猛勢ひ武地を掠め所材を盗し紀を恐るべきと入た
天下強紀の附うれば誰ら先と制をべき人もなく故右大臣信
長公諸代〳〵たまへども国中の一揆多敵く破せば諸多信長
公の軍と討敗し安紀の多度ふうれども其物い軍多率ちげく

猛勇の信長公を後より打捨て亜張ひ紀ろ小山度大納言秀長卿
紀伊の大守に任せられ給ひ敵とんて国中へ福ら三るい今度羽
柴大納言秀長大和和泉紀伊三国の大守うれば村〻郡〻の国た
るもの郡山の城へ速登城〳〵国守と称し給へ命と兼るべし と仰渡さ
れば紀伊の国中ところ〻心〻うて武い長う系勅任るべき旨御うけ
給もあり入と申〳〵ける 在藤村の計義の同志とる者もあり老角
一交せざる中よる敵熊野根来多るハ一向小元敵中さば嘲笑して居さ
まるる元沢根来寺の大衆多い俄者と嘲哢 悪言沢吐又捕とて
猴と麿ぎ合戦の刻元紀白 ろる面上俄郡山へ三陣うちくゝ
中紀中よれば秀長卿安〳〵ば元る大坂へくと告げ給へば秀吉公
大きに怒りあくまで坊を多ろうまひるを俄ちしば軍勝を記し

さんぐうの石垣
合戦の図

先根来寺と號せよとて大納言秀次を副わせ給ひ細河与八郎忠
興蒲生忠三郎氏郷中川侍従瀬戸内海の海賊を秀吉の命令で
秀吉政所并義弘郎宗次長谷川藤五郎秀一等を先として
合十余万人天正十三年三月十九日紀伊根来寺へと数回の根来の
僧徒を攻めくさんび防禦の要害として泉州岸和田の城より始め
くみ石垣積岩寺渓城三ケ所の要害を構へ大坂勢と防ぎたんとし
柳山根来寺の僧徒天仁年中発願上人の開基にて厳密の
霊地なりしに近頃僧徒戒定慧の行ひを忘れ兵器を携へ弓鉄砲
を以て人を殺し去地を奪ひ強悪のふるまひ殺害の名を人々を
惜まぬとなり秀吉公歎の要害とかまへ秀次と籠城
なと極秀政并宗次長谷川秀一等仕りて石垣を積ませ細
河与八郎蒲生忠三郎を積岩寺と押へさせ中河侍従ならびに山右近は
渓の城を押へられ秀吉公の御籠城を法く押へさせ給ひ石
垣の堅き根来寺の悪僧どもら諸国の浪人沢山剛勇の兵士を
召しつれ又百人撰籠りしが寄手の先陣秀政勢近く寄せ
るを見て完麦の村より又百余人城より出さんぐるを村させるれば城が
軍勢面を向けて毎日村ちまれくとて召し秀次公
の若去ねるれば城を見て籠城中に向ひる石垣の要害に構へし
岩をれば城石垣もてうく敵いみまじきに誘馬の武者を石弓村
る歌勢と横横より誣崩歌の引村急よ麦法ら村入せよやと下知
く法の行よ毎り雄乃武者田中久兵衛尉渡部左衛門助佐藤源
兵一度よ馬と駆出せば秀次郎の籠城三千余人一度よ喰と聞て

春日太


の図
南無大師
河

撰合りまもしてに実誓れば城秀政信安長谷川竜也同附の国を
合せ八方より新手れば城兵さんぐゝの死を大の門より引入てとゝの
や所へ入せよと書るれ大勢村雲をくひ〳〵と寄へを城中より大
木大石投かけ弓鉄砲を雨の降ごとく打出る寄るの大軍遠間の
く寄りけるが先の進し兵士武百余人的の方へ向く打倒され寄へ
ちこひしように攻にと一所斗退きく潜く息をつぎ居そう

根来寺焼亡

筒井屋敷に郎実次い秀吉公の御先へと又帰参の者をて大和国を
出るなりほどの次第なれば会戦のめざま敷きる名を臣
出ろの恥辱を雪んものと勢三万百人の親族を伴うけ陽陰
近く攻寄るが先を見て城長谷川同く勢をあつ後炮と打うち大

矢を発し死人を負をふゝうとのりう大功と一挙の事ひろされども城中
出もひるまじ拒にく〳〵勢と配り彩の村々へ帯を繋く防ぎ
戦かなで寄るも左右ちく近寄羅くをとり城の陽陰きの入の後
て稼〳〵てる石垣ろの付れる寄るの心い強く勇むとへども要固の構
〳〵要害の兎角の劉兵擒籠り配力と居て防戦とれば負討
死のこと〳〵一人も陽陰へ寄る強いに方と囲軍勢ども拳を極
牙と噛塀と白眼で居ろ〳〵陽陰弁宗次きんつちかくていろ
ろ大功を所ろんぐ死とて家居中防死彈当侍賀の侍山田名張数部
寄ふ食じ城の搦手へ押寄風とろ史拳成遠間方く対近せ〳〵陽の
附ろろ城中の名流の業慈の史孫ろ忽烈史に方の死の留
乃色に〳〵鳴ぶでく先の鎬く死とる兵卒六百余人八方の櫓く

悪く槌出く防ぐ所に中うみざれば公の先にて城門を開き切て出る
を肥前城長谷川弟きりひろ討ぐに城兵右往左往に斬る
ちまちちりぬ人ふかく落行る家の雑賀運平日大六根来飯一房
大一房五三房とつる大勇五双の強兵あり討洩されし兵百余人
若後より追ひ肥前が陣へ来て切入り肥前勢ひまんまんと
物にうまひて戦ふ間に雑賀大六大方おろり若乗る武者八
九人新側に肥前実次とちぐけ一番に駆来る根来刑部の宝
次ちかも勢ぜび什代の肥前九二尺七寸の太刀を向よりざし大
六と出ちりと戦ひ大六いぐ左の肩さたち右の脇まで切
さげられば流石の大六二つに分れ雑賀運平又るより飛
うかく切落び実次脇より飛来る根来刑部の長槍を

左右湯門跳来りく後より運平と共にく抱きたるりぐ抱き
ぎりの運平大きに小柳りうり敵に組合劉力と出りく探
合に運平力まさりはく槍谷を右に即実次右の脇脇より二刀と指通に
刎り上て首とるうり根来の悪僧飯一房に一文計の鉄棒と腰く
おろり曲る者と微塵に上て麓け南山に退散し猛勇さう
よ敵とるるの方く左方とうくく立て根来飯に大力の法へ
ある布施小左即方材左即両人切先とかくべく歩てうれ飯一
房彼鉄棒おろりと二人を相手にして切合が布施方材の両人共
鉄棒にて方おわるるし雑賀人ふる槍谷と左右湯門飛入く
飯一房に組付うり飯一房よ槍谷ぶと帯掴んでぐりくとしとげ

根来の
亟一房
肩衣姿の
浦士と戦ふ図

右手の方へ三間余り投られたる布施万材両人は逃げんとせし所を左右より腕に取つきしを見て是れ鴻彰吉松余九市郎右と左右より手を捕へ布施万材を討せじと掛合時に森繁殿中坊左近山田多仲張政部等もかゝらんと押寄る所に兵衛が打たんとて間なく一人を生捕りたる松宮源太郎[illegible]して勝たる坊主も切てまてすく出りたれば松倉九市郎右も尤と思ひ首打落して捨に向り大一房及び三房も共に是に戦ひ敵を討取るなし然れども乱軍の内に斬死をなしぬり、然れども今は或むる敵一人もなく石城落城し討たる首凡百余級是を庭に切かけさせ勝鬨を揚て進みたる小積吉寺濱の城二ヶ所に擒籠りたる悪僧及び浪士等多る石城落城の様を見て魂を消し城を出て之を引くに落行たる秀吉公は味方を合し其勢を根来

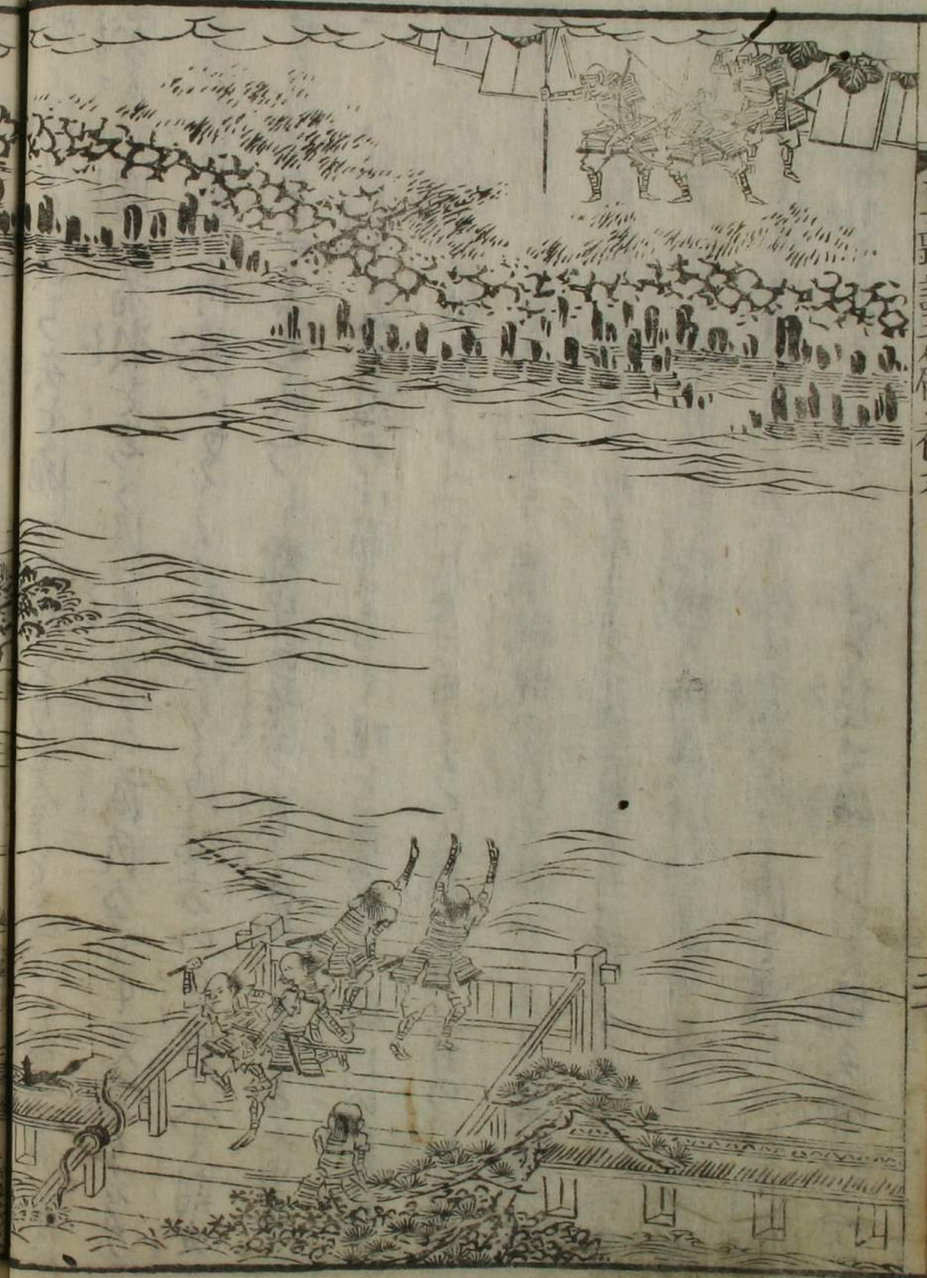
寺と責ぬけやと大納言秀次卿を先手の大将となし三月廿一日根来寺へ押寄せ給ふ此時根来寺には剛勇の僧兵士へる石堀及び三ヶ所の出城に籠籠せ彼所にて喰止めんとせしが其外の[illegible]落失寺に籠る者どもは老たる僧幼き童など物の用にもたゝずし者ども三百余人残り居たれば秀吉公の大軍押来るを見て防ぎ戦ふべき者もなく我先にと落行寺僧等物の此気勢に驚きて此本尊如来は[illegible]逃げしが[illegible]逃されよとて[illegible]経巻は此箱に入れ置べしと寺を出んとする所へ秀吉公の先陣はや門外へ押寄せ鉄砲をどつと打かけたれば寺中の僧は腰をぬかし老たる比丘幼き児は門辺に逃出ちる所を老若の嫌ひなく片端より切まくり火をかけ

根来者
焼ヒの
図

これ焔天に昇り黒煙空中に充てびき達つゝ焼ける大願佛閣
御門の焦たゝるかゝる濃日にうち換へ雑兵ども煙の中に乱入て
彼方此方を捜し廻り金銭財宝を奪ひ佛像経巻を焼
ぬる間後の悪名を流さんこそ口惜しけれ
これを思ひ知れ

紀伊國平均

扨又廿二日秀吉公軍勢を引率して雑賀を攻て押寄せ
雑賀の一揆三万余騎大田村の城に籠り鉄砲を放せ
防ぎ戦ひて結居たり秀吉公乃大軍に面より攻掛のゝ
開き喚き叫んで只一揆に襲ひ掛る程に攻
焼と向方へ放ち矢と鉄砲石礫雨の如く降ぎ戦ひ
雑賀の配陽の者数を尽し防ぎ難き故秀吉公を御逆じ
ぜんい後なきすざまはしく城中の発ぶ無くてゝ
二万人の人まを城の四面より取囲き吉川の急流と
堀入を攻る時浮よる三月廿三日より四月初日二日の夜を流
み渡くとゝろぎり集り乱離敗の敗を外に西の霞敷み
たりうひとり橋の中陣取るゝ人這迫ぬ一揆衆を捜さん
とゝろ後に附く魁くよみ惜り何様け様すれ一両日も嘆さ
らんに此城水底に沈む一人も活る者みゝと城中一日の力と
為し籠居ぬき二揆だゝ寄を揚て渡る時嫌矢倉にて



太田村の
城を攻める図
降参

・考りを拵へ助けてゑ〻くと冴閉せい城はしうし次第へうしゐ
よりく城中より秀吉公乃御陣へ澤瀉のはし紙を人とのせて
希ひ名れい秀吉公もたのゐしよ之旦一揆の株梁さう者悉く切
殺せば老少の賢助命せらゞと仰出され名れい城中一揆の殺
る者百又十三人切殺し城を開きお渡せい秀吉公牧て中村
孫平治をもて城代うしゐ籠城を切てみを落〻たまい
城中乃男女我さゝと落行て雑賀の一揆ゝ平治〻帰り
ゐ月又日秀吉公雑賀表と出ゐ〻く鷲尾と征伐みゞと大軍
勢のゞく押行給よる此附紀及一国の人民秀吉公の威勢み恐
旦敬て歓対をんと企る者一人もなく鷲尾寺宮新宮の社人
を外近村の百姓ゞも乃命令(近藤と打殺を地よ付悪澤瀉)

名れい秀吉公完介と打殺給ひ名く助命せらゞ之稱給濃さ旦一
ゐ鷲尾の地い乃法師乃手印を中よ教ゑ乃関所と屋人雑賀の
旅人と詰し乃具い要害とたのゞて紀と紀ゝ宋言語乃部乃次
第ちり又逃不〻乃関所と廣し雑賀と心乃儘よせ〻むゞし〻
命じ給へい新宮寺宮の社人ゞも潅で命乃如ゐ光て張て詰く
御い〻ゐ場り申して鷲尾山と表らゞと濃せらゞ名ゞ先上後と
以て偽後のゐせる不義と既し至て征伐みゞ〻て茶田法
印給と兼て智恵乃強とかく其書に曰
一海師手印の載る不寺紀さゝを外奉素抑紀とる
不の者い逃ゐ寺ゐ逃と申ゐ逃とゞし紀らゞんバ一山既ゐ海師の
法ゐ宵き滅乃乃基ゐ絶ゐ乃ゝ手

一奇僧彩人多学問を嗜び甲冑弓矢鉄砲と称へ亜流門々幸業よりして悪逆無道を尽さんとす仍四後学問を勧め武具を捨てんとす

一勢欲国欲凶徒怨讐乃輩山中より来り匿る附僧徒を扶助し即芝用眞也自今以後これを制禁あり若親を喪ひ又と無い武士人と面目あり面目なしと警を勇猛世美実義乃心乃強い在山をとゝめども制の限りにいたらず北畠山根来寺の滅亡を見て眼前の烟戒とすべし

右之条々衆徒彩人多日心より抑ひて法度を捨ぐべ濁山各心底を清をどんば秀吉もと奥隆とべきなり

天正十三年巳月十日

秀吉判

高野山衆徒等

かくれなき文書多数山へ到来し一山の僧徒多義衆議区々なり然れども眼前根来寺を外高野の一揆鳥羽と信長と攻ぐ滅ぼ者と繰る十余日の内を征せ〜是羽柴殿之進べ熊野彩寺宮及び近き村里とぐ〜降参今い紀見一国を法服の名を脱〜ぬる多猶り出山の〜我意次中之命に逆人猶なりべ絶よい山の破滅なるべし不如を伝多帰べへ衆議一決細寺彩人多就て法度を接げ落〜厳命を守る永く違反なく濁山乃老弱一日多悪意を仰ぎ寄り君遠背みた抑ひて法度

秀吉公
和泉乃
浦と
堺
港
園

紙と書るとゝ人とも眼みぐゝしぐとゝ謹で上をれば秀衡も大感
限りなく寄附る委細の旨を後謹で命を守るべきとて日月十
二日和歌の浦と称する玉津嶋へ詣給ふ勝地の風景絵図
給ふ和歌
　おもしろく玉津嶋より詠るに緑さらさら布引のまゝ
廿五十七日旅軍と引て大坂の渡場へ給ふ

巳國征伐

去比國の長曾我部宮内少輔元親と申者あり渠が先祖と弱る
本朝人皇三十八代天智天皇の御宇百濟國より吾朝へ拡
玉玉帯と貢ぎを後日本に止り孫是丈仕給ひて業地を
綸り姓と秦と給ふを後應永年中渠が十七代の孫秦元勝と云
者不幸ふて代々の領地を奪ひ信濃へ去て源流せ給ふ元親
来り江村来る恵を以て巳國長岡郡に城を築き幼氏と曾我
郡と改むるに後巳國香美郡に移る我郡に移る地名みな元親
郡をも移我郡来と呼ぶ是なり今一国と称へ元勝長曾
我郡と云ひ今一人い香美我郡と改む文亨の初代去比國の
と巳郡岡豪に築く後に小弟綱りて永正の比長曾我郡元秀
ゆもの巳國の武士本山吉良大平などと云者と戦ひ力無く対記と
其子なる豆丸年いまだ幼去比の國司一条房家卿の客分せ
生長て長曾我郡宮内少輔元國と名乗り又が居城岡豪を改て
國天文八年己亥又月男子を生む生長の人で力量衆に抜
御國中の歌に別名と元親と呼り弘治二年元國病死元親てへ

羽

甚衣と称ぎ自宮内お鋪と改め武威をふるて遠近と切りびけ國司
と始め左伯七郎惣く元親ぐ程よ入續く門波國と切る渡海を
手げ濱波伊豫と後吾妻國の地悪く長曾我部ゲ令と守ま敬く
歓対せる者臣附よ氏物小田右大臣信長ニ頻に賊名登ん之く武
勢の様栄ぬり給へば元親小田の幕下に属せんとく書信を通ト
頗志をうさふけるる小計ざりき信長ニ惟任ゲ逆心よりを強奪して
戦せらるる治ひぬ吉び今い自身天下北武ねと仰ぎ思て大志と賜ふ一宿
國の要害と厳重に構へ附節と又合せ居ようる紙るる羽柴秀
吉ニ山陰よ光秀ぬと敵ふ柳瀬よ柴田と後ー拉勢自強大にあり
近國の大名皆膝とうでめて服従ふ天下一統ぬ兆既ぬ敬ふ乱で長
曾我部元親白眼よ見と又く歓対ぬうさび法眼もせん國ぬ守

勝頼政勝
本陣乃城の
みつのまへを
新こく
城兵と
若ー
むかい
図

を固め静かうへ引く居さうろう此時秀吉大坂を立撤し浦の浦国の
大名悉服せざる輩を追討し給ひ[illegible]の長門我部元親軍威を募り国を押し領国の籠居て敵を上洛さ
る間先兵を紀さるべしとて後詰んで談彼伊豫の二国を召上らるべきしも
給出される小長門我部御下知に洛中に見る第一人の力こそ新洛
地なれ[illegible]の上にらるべき謂もなし[illegible]羽柴殿今帝都を
護し武勇の振深さ[illegible]風の[illegible]
以ての余の国を抑へて御下知に洛中に[illegible]
て[illegible]言葉及び出さず秀吉さ〳〵軍勢をとゝひけ征伐[illegible]と
て浦浦の須本へ押渡る軍兵い大和大納言秀長卿と大将として
及数内の勢三万余騎河内岩屋浦の勢い近江中納言秀次卿と

大将として摂津丹波の兵士三万余騎伊予の国の[illegible]秀吉の[illegible]
秀吉の[illegible]軍平[illegible]勢三万余騎毛利[illegible]小早川隆
景吉川元春[illegible]秀吉の御下知を應じ[illegible]三万余騎と引率し
[illegible]張て長宗我部元親と国要害の城くを軍勢を籠て浦浦国を
[illegible]と守らしむ大納言秀長卿い秀次と勢を合せ都合十万余騎[illegible]
長浦より阿波鳴戸を経て渡し小河の[illegible]行本津の城[illegible]
を守る大将い秀名尾張門[illegible]龍[illegible]
[illegible]と安て長曾二百余人城より出[illegible]本津の[illegible]海と右[illegible]
めて給ふ[illegible]二万勢の先陣[illegible]
即名国を[illegible]て寄[illegible]を給まふ[illegible]

折ふし先に進し信濃守が手兵三十騎計り〳〵と打出るさゝ山伏
軍幸ともせず踏こん〳〵切こむ敵の三番三番攻くりけるに城兵何ぞ
先に欲とぞ[illegible]〳〵よりて城中へ引入る[illegible]者も一日は間を隔て[illegible]
[illegible]本[illegible]引の[illegible]城際と攻[illegible]鉄炮を打矢を放[illegible]暫時は城を[illegible]
[illegible]て責る城中も応[illegible]大石[illegible]大筒を放ち巌
[illegible]ぎ戦[illegible]城[illegible]方皆岩石[illegible]人馬の呉[illegible]る[illegible]要害固き城
[illegible]が[illegible]大軍[illegible]攻[illegible]き方[illegible]軍[illegible]日と落
る勝[illegible]賀小六郎[illegible]城外の地理を[illegible]候[illegible]言[illegible]攻[illegible]軍と
てやるゐ城要害堅固[illegible]
の山[illegible]勢と[illegible]て若城中より水と汲ハ急[illegible]
とや和[illegible]三百人の退兵[illegible]按のごく[illegible]

[illegible]五六十の人まの痛と為い若のみと汲んとをると勝浜奴ゑ軍兵に
方より元を行溜より切側せべ[illegible]るれが肝とり〳〵[illegible]と
消〳〵さんぐよ逃うう名[illegible]より考の牧十軍勢と巳方の山より陸
元とさ世一備をあを城中へ汲せば元より張て城兵渇る落こ井を
城立ども山手るく〳〵てあ痛ゆるく[illegible]落ゑて力と為[illegible]や落ゑ変城
る兵士ゑうう多城ゑ奉石尤湧門射山神ゑそれ籠城せんゑ叫ふべう
らびとゑ武家風強く大雨頻ゑ深名射を物ゑふまぎれ名鎖
引ぐ搦ゑより城を出ん流とさして落ゑ名

編年古圓記五篇巻之六終